

日本語讀本 卷三



もくろく

赤いとり
なはとび
うさぎ
しりとり
さるのいへ
ひよこ

時計

かくれんぼ

考へもの

かげぼうし

蝶々

まさらちゃん

町ねずみ

あなかねずみ

牛若丸

雨の絲

自動車

と

一寸ぼうし

土の糸

ジヨアンぢいさん

ムシバのを

浦島太郎

リオ、デ、ジャネイロ

二ニニ二ニ二十九十十十十十十十九八七六五四三二一
十十十十十九八七六五四三二一
五四三二一

一 赤い とり

赤い とり、

小とり、

なぜ、なぜ

赤い。

赤い み を

たべた。

(新 い とり なぜ み を たべ)



白いとり、

小とり、

なぜ、なぜ

白いみを

白いみを

たべた。

青いとり、

小とり、

なぜ、なぜ

青い。

青いみを

たべた。



二 なはとび

一だん、二だん、

なは とんだ、とんだ。

三だん とんだ、

四だん も とんだ。

五だん の なは も、

つづいて とんだ。

六だん、七だん、

八だん とんだ。

九だん、十だん、

なは とんだ、とんだ。

(新 は び(ひ) だ ん も の つ づ て)

二 なはとび

一だん、二だん、

なは とんだ、とんだ。

三だん とんだ、

四だん も とんだ。

五だん の なは も、

つづいて とんだ。

六だん、七だん、

八だん とんだ。

九だん、十だん、

なは とんだ、とんだ。



三 うさぎ

白い、

かはいい

うさぎさん。

お耳(みみ) が

長い、

目 が

赤い。

おには に

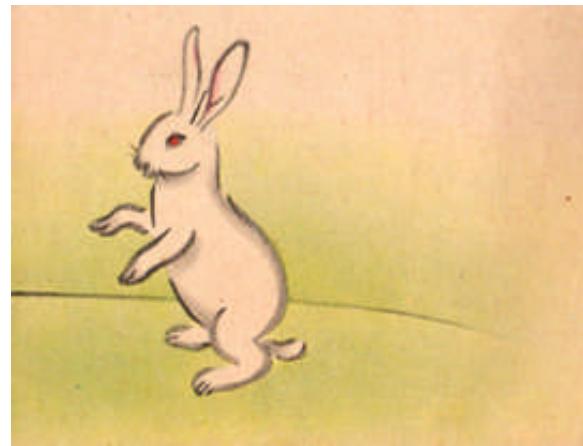
出す と、

よろこんで、

ぴょん ぴょん

はねます、

をどります。



ねまど (新うさぎぎき) かおがにすよろこで

四 しりとり

太郎「ゆき子さん から はじめて ください。」

ゆき子「では、言ひます よ。はちすずめ。」

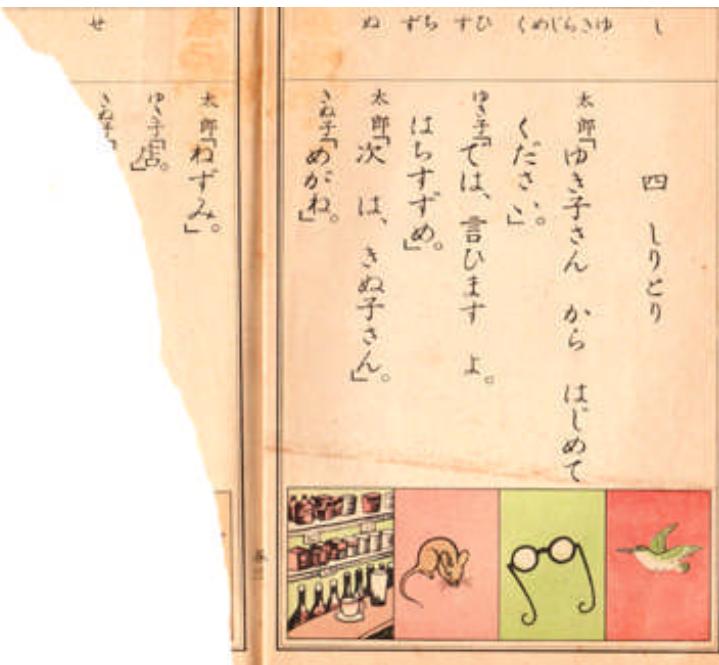
太郎「次 は、きぬ子さん。」

きぬ子「めがね。」

太郎「ねずみ。」

ゆき子「店。」

(後半、紙が切れている為不明)



(前半、紙が切れている為不明)

太郎「早く、早く。」

きぬ子「早く、早く。早く つづけなさい と、ゆき
子さん の まけ です よ。」

五 さる の いへ

つめたい 雨 の ふる ばん でした。
たくさんの さる が、やし の 木 の は
を かさねた 上 に、ねて ありました。

(009. jpg)

だんだん 雨 が ひどく なつて、かみなり

さへ 鳴つて 来ます と、子

ざるたち は、さむさ と

こはさに ふるくながら、

「おとうさん、早く

おうち を た

てて ぐださい。」

「おかあさん、早く



おうちをたててください。」

と 言ひました。

おとうさんやおかあさんのやるは、
「ああ、いいとも。あしたになつたら、
たててあげるよ。」

「あしたはきっとたててあげるよ。
今夜は、しかたがないから、その
ままおやすみ。」

(新ぎむあげそ)

(010. jpg)

かう 言つてなぐさめました。

朝になると、雨もかみなりも止
んで、うつくしい朝日がきらきら
かがやきました。おやせるは、

「まあ、おうちをたてよう。お前たちも、

みんな、早くおきて手つだいなさい。」

と ひいて、子ざるたちをおこしました。

子ざるたちは、目をさましましたが、

「もう すこし 待つて ください。おなか が
すいて たまりません から、何 か たべ
て から に して ください。」

と 一ぴき が 言出します。と 外 の 子

ざるたち も、

「わたし も おなか が すきました。」

「何 か たべて から にして ください。」

こんな こと を 言いながら、みんな たべ

(新 ぐ わ)

(011. .j p g)

もの を さがし に 出て 行つて しまひ
ました。

天き が よい ので、子ざるたち は、いへ
を たてる こと は すっかり わすれて、
一日 あそびまはつて、夕方 かへつて 来ま
す と、また 雨 が、ふり出しました。

すると、子ざるたち は、

「おとうさん、雨 が ふり出しました。早く

おうち をたてて ぐださい。」

「おかあさん、早く おうち が できない
と、こあります。」

と 言ひました。

六 ひよこ

一一一 日 前 から、めんどうり が す につ

(天 れ)

(012. j p 8)

きました。けさ、おかあさん が、たまご を
入れて おやり に なりました。めんどうり
は、へんな こゑ を 立てて みました が、
見て ある うちに、たまご を はら の
下 に、だいて しました。

魚 や 水 を やつて も、見向き も し
ないで、たまご を あたためて あります。

おかあさん に、

「いつ ひよこ が 出ます か。」

と もれます と、

「二十日 ばかり たつ

と 出ます。」

と おっしゃいました。

(二)

ある朝、おかあさん が、

「ひよこ が かへつた。」

(新 組 二十日)



(013. jpg)

と おっしゃつた ので、見 に 行きます と、
おやどり の むね の 所 から、ひよこ
が、小さな あたま を 出して、ぴょ、ぴょ、
と ないで ありました。はね の 下 にも、
二三|ば ゐる よう でした。

ひよこ が なく と、おやどり は、お話
でも する よう に、い、こ、こ、こ、こ、と

いつて るました。

(三)

「三日 たつと、おやどりはひよこを
にはへつれ出しました。ひよこはみん
なで十ぱです。

ひよこは、ほそいあしたで、ちよこちよこ
あるきます。たべものでもさがすので
せう、きいろいくちばしで、ときどき、ぢ
めんをつづきます。なのはや、こ米
(新 ぱ ほ ぢ)

(014.jpg)

をやると、ひよこはみんなよつて
来てたべます。おやどりはなんにもた
べないで、こ、こ、こ、こ、といひながら、その
へんを見まはります。

ねこでもそばへ来ると、おやどり
は、おこつて毛をさかだてます。

私は、学校からかへって、ひよこを見るのが、たのしみです。

七 時計(とけい)

ぼくのうちに、古い柱時計があります。これは、おとうさんやおかあさんが、日本から持つて来られたものださうです。

毎朝、ぼくが目をさますころ、「ちん、ちん、ちん、ちん、ちん」と、よい音

(新漢字 毛 學校 ぼ 古 柱 朝)

(015.jpg)

で六つ鳴ります。

学校へ行く時や、かへった時に、ぼくはきっと、この時計を見ます。日ようの朝などは、おかあさんも、この時計を「さらんになつて、

「ああ、けさは、だいぶ朝ねをしまし

た。」

など と、おっしゃって るろ こと が あ
ります。

きのふ、ぼく が 學校 から かへつて 来
て、見ると、時計 が ありますん。どう
した の か と おもつて、夕方、おかあさ
ん が おかへり になつた 時、きいて
みる と、

「ぐあひ が わるく なつた から、なほし
に やつた の です。」

(新 ぶ)

(016.jpg 挿絵あり)

と おっしゃいました。これ まで、毎日 き
きなれた、「かつちん、かつちん。」といふ 音
が きこえないで、何 と なく さびし
い 気 が しました。

タはん の 時、にいさん が、
「もう 何時 だらう。」

と 言つて、時計を 見よう と した の
で、ぼく が 笑ひ出します と、みんな が
大笑 を
しました。ところ が、
けさ 学校 に行く
時、ぼく も、つい、時計
を 見よう と しました
ので、そば に おいで に
なった おかあさん が、
お笑ひ に なりました。

(新漢字 之 氣 時 笑)

(017.jpg 挿絵あり)



八 かくれんぼ

タ やけ、こ やけ、

日 の あ る うち に、
み んな で、一 しょ に

か くれんぼ しま せう。

じ ゃん、け ん、ぽ ん。

石、か 美、は さみ。

じ ゃん け ん、ぽ ん。

は さみ は お に よ、

目 つぶ りお に よ、

さあ さあ、あ ちら で

か くれま せう。

バ ナ、の か げ に、

(新 ほ)

お うち の か げ に、

も う い く かい。

(018. jpg)

もう いゝ よ。

それ それ、さがせ、
バナゝ の かげ を、
おうち の かげ を。

九 蛙(かへる)

蛙 の 子ども が、川ばた で あそんで
みました。

そこ へ 牛 が 来て、

水をのみました。子
蛙 は、びっくり して、
にげ出しました。

子蛙 は、あわてて う
ち へ かへりました。



に、

「大きい、大きい ばけもの が、水を の
み に 来ました よ。」

と 言ひました。

近所 に あた 大蛙 が、それを きいて、
「その 大きな ばけもの は、わたし くら
ゐ も あつた か ね。」

と きゝました。

子蛙 は

「どうして どうして。今 まで 見た こと
も ない ほど 大きい の です。」

と こたへました。

大きい の が じまん の 大蛙 は、うん
と いき を 吸ひこんで、おなか を、ふく
らませて、

(新漢字 吸)

(020.jpg)

「そんなら、このくらゐ も あつた か ね。」

と 言ひました。子蛙 は 首 をふって、
「とても そんな もの では ありません。」
と 言ひました。

「では、いの くらゐ か ね。」
と 言ひて、大蛙 は、一そゝ おなか をふ
くらませました。

子蛙 は、

「をばりさん、およし なさい。 いくら おなか
を ふくらませて も、

かなひません よ。」

と 言いました。

しかし、大蛙 は、今度
こそ と、一生けんめい
になつて、いき を 吸
ひこみました。 おなか



(新漢字 生)

(021. .jpg 挿絵あり)

は、まるで、ふうせん玉 の やう に ふく

れました。

すると、「ぽん。」と 大きい 音が して、大
蛙の おなか が やぶれて しまひました。

十 考へもの

「この はこ の中 に、おもしろい 人
が あます。あてて 『ごらん なさい。』

「その はこ を かし
て ください。」

「はい。」

「ふつて も よう ござ
ります か。」

「はい。」

「大そう かるう ござります ね。この 人
は、どんな 色 の きもの を きて あ

「ます か。」

「赤い きもの を きて るます。」

「それ では、女 でせう。」

「いゝえ。」

「それ では、男の子 です か。」

「いゝえ。年より です。」

「どうも こまりました。どんな かほ を
して るま す か。」

「かほぢゅう ひげだらけです。」

「それ では、手 も

足 も ない でせう。」

「はい。」

「分かりました。だるまさん です。」

十一 かげぼうし



(新漢字 女 男)

(023. .j p g)

ビヤノ の 音 に、

足なみ そろへ、

みんな で なか よく

ゆうぎ を すれば、

まつへろへろ の

かげぼうし、

やつぱり そろって

を どつてる。

なかよし どうし、

手 と 手 を ひいて、

夕日 の 小みち を

かへろ と すれば、

長い 長い

かげぼうし、

やつぱり ならんで

ついて 来る。

十二 蝶々(チヨウチョウ)

今日 學校 デ、運動場(ウンドウバ) ヲ アルイテ キマ
ス ト、教室(キヨウシツ) ノ 東 ノ マド下 二、私
ノ スキナ、キイロイ 蝶々 ガ、シヅカ ニ
トマツテ キマシタ。

ソバ ヘ ヨツテ ヨク 見マス ト、蝶々 ハ
スツカリ ヨワツテ、トベナク ナツテ キル
ラシイ ノ デス。ソレデモ、ソノ ウツクシ
イ 羽 ダケ ハ、カスカニ 動カシテ 卍
マシタ。

「オ前、ド
ウ シタ

ノ。」

私 ハ、オモハズ、ロ ノ 中 デ、カウ 言

(新漢字 ャ 今日 東 羽 動)

ヒマシタ。
(025.jpg)



「病氣 ダラウ カ。ソレトモ、ダレ カ ガ

イタヅラ ヲ シテ、コンナ ニ シテ シ

マツタノ ダラウ カ。カハイサウ ニ。

死ナナケレバ ヨイ ガ。」

私 ハ 一人 コンナ コト ヲ 考ヘナガラ、
ジット見テ キマシタ。スルト、蝶々ハ、死
ンダ モノ ガ 生キカヘッタ ヨウ ニ、急
ニ カヅイテ ソノ ヘン ヲ グルグル ト
マハリ始メマシタ。ケレドモ、ヤツパリ トブ
コト ハ デキマセン。羽 ヲ イタメテ 卍
ル ノ デセウ。

ヤガテ サツト 風ガ吹イテ 來マシタ。蝶
蝶 ハ コレ ニ 吹キトバサレマイ ト スル
ヨウ デシタ ガ、ソレデモ、三十センチメー
トル バカリ 横 ノ 方 ヘ ヤテレマシタ。

(新漢字 病 死 生 急 力 始

(026. jpg)

カハイサウ デス カラ、私 ハ、ソツト、風
ノ 吹カナイ 所 ヘ ツレテ 行ツテ ヤラ

ウト オモヒマシタ。トコロ ガ、ソノ 時
チヨウド、教室 ヘ ハイルカネ ガ 鳴リ
マシタ ノデ、シカタ ガ ナク、ソノ マ、
ステテ 行キマシタ。

次 ノ 休時間 ニ、私 ハ、モウ一度 前
ノ 所 ヘ 行ツテ 見マシタ。サウシテ、
サツキ ノ 蝶々 ヲ サガシマシタ ガ、見
ツカリマセン デシタ。

ドウ ナツタ ノ デセウ。チヨウブ ニ ナツ
テ、ドコ カ ヘ トビ去ツタ ノデセウ
カ。ソレトモ、鳥 ニ デモ 食ベラレテ シ
マツタ ノデセウ カ。

十三 まさちゃん

(新漢字 休 間 去 鳥)

学校 から かへる と、しんだい の 中で、
まさちゃん が、まるまる ふとつた 小さな

(027.jpg)

手を、ふりながら、「あん、あん。」と泣いてゐました。

「まさちやん、どうしたの。」

と、私があたまをなでてやると、前よりももっと大きな声で、泣出しました。

「まさちやん、これをあげませう。」

と、おもちゃを、その小さな手ににぎりせました。けれども、まさちやんはまだ泣止みません。

「おかあさん、は、どこへおいでになつたのだらう。こまつたなあ。」

とおもひましたが、しかたがありません。

「よう、よう。泣くんぢやないよう。」

(新漢字 泣)

(028.jpg)

とあやしながら、まさちやんをだいて外へ出ました。すると、向かふのはたけ

に おかあさん の 姿 が 見えました。

その 時、みよちやん の にいさんが、カミニヨン で 来ました ので、さっそく のせて いたゞきました。

おかあさんは、私たち を 見る と、

「まわちゃん は、目 を やました の ね。
まあ、どう した の、きぬちゃん まで
なみだ を ためて。」

と、にこにこ しながら、おつしゃいました。それから、みよちやん の にいさん に、

「どう もありがたう 『ざわい』ます。」
と おつしゃいました。

まさちやん は、もう おかあさん の おひざ
で、おいしそう におちゝ を のんで ゐ

(新漢字 疎)

(029. .jpwg)

ます。

「まわちゃん、そんな に

おいしい の。」

とき、ますと、まさ
ちゃんは、ちばせを
くはへたまゝ、目を
ぱつちりあけて、じつと
私を見ました。

十四 町ねずみとゐなかねずみ

町のお金持のやしきにすんでゐる
ねずみが、ゐなかの百姓家にすんで
ゐるねずみと、お友だちになりました。
ある日、ゐなかねずみから、町ねずみの所
へ手紙が来て、

「今日は春さきで、じこうはよいし、

(新漢字 町 金 友)

野原(のはら)には、すみれやたんぽ、の花



(030.jpg)

が 咲いて、ま」と に きれい です。び
うぞ、ゐな か の けしき を 見がてら、
ぜひ、おあそび に おいで ください。」
と 書いて ありました。

そこで、町ねずみ が、はるばる たづねて 行
きますと、ゐなかねずみ は 大そう よう
こんで、おひるの ごちそう には、かたい
琴 や、とうもうし や、くるみ や、それ
から 土 の にほひ の ぶんぶんする 草
の 根 など を、いろいろ ならべました。
しかし、せつかく の ごちそうも、町 の
お客様 の ぜいたくな 口 には、とても
合いません。

「どうも せつかく だ が、ぼく には、こ
んな もの は たべられない よ。」

(新漢字 ぞ 書 琴 ふ 根 合)

(031. -page)

「どうして だらう。ぼく の 所 では、こ

れが一ばんの「ちそうだが。」

「やつかね。すると、君は氣の毒だ
が、こんなあなかにひつこんでゐて、
まるで、ありかみ、ずのようなく
らしをしてゐるのだね。まあ一
度、ぼくのうちへ、あそびに来て
みたまへ。肉でも、ビスケットでも、り
んごでも、いちじくでも、何でも君
の好きなものを、たべさせてやるよ。」
かう言つて、町ねずみは、わかれでかへつ
て行きました。

町ねずみの話をきいてから、あなかね
ずみは急に、町へ出てみたくなり
ました。肉だの、ビスケットだの、りんご
だのといふ、これまで知らなかつた

(新漢字 毒 肉 好)

(032.jpg)

「ちそうも、たべてみたくなりました。」

そこで、一一日して、ゐなかねずみは、町ねずみをたづねて行きました。町ねずみは、ゐなかねずみがたづねて來たので、「やあ、よく來てくれた、よく來てくれた。」

と言つて、よちこびました。さうして、さつそく、大とくいで、だい所のすみの、自分のですにあんないして、肉だの、くだものだの、かんづめなどのはいつてゐる戸だなを見せました。ゐなかねずみは、たゞもう目をまるくして、おいしさうなにほいに、よだれをたらしてゐました。

そばで、町ねずみは、さもをかしさうに、「さあ、君。よかつたら、えんりよなしに

(新漢字自分)

(033.jpg)

食べてくれたまく。」

と、いばつて 言いました。

「さう かね。すまない なあ。」

かう 言ひながら、こはゞは、

ゐなか の お客様が、

いよいよ、ごちそう の

お皿 に 手を つけよう と しますと、

たべて くれ
たまへ。
と、いばつて 言いました。
「さう かね。すまない なあ。」
かう 言ひながら、こはこは、
ゐなか の お客様が、
いよく、ごちそう の
お皿 に 手を つけよう と しますと、



その とたん、ばたんと 戸が あいて、女
の 人 が はいつて 来ました。すると、町ね
ずみは、びっくりして、あわてて、ごちそう

の お皿 も 何 も はぶり出した まゝ、
「君、早く、早、早く。」

と 言ひながら、かゞ の 小さな 穴 の 中
へ にげこみました。

ゐなかねずみ も、あわてて、あと から 穴

(新漢字 穴)

(034. -p 8)

の 中 へ もぐりこみました。穴 の 中
は、まつくりで、しめつぼくて、じつ に
いやな 気持 でした。

そのうち、外 が しづか になつた ので、
町ねずみ は、「そそ、穴 から はひ出しました。ゐなかねずみ も、つゞいて のこの
こ はひ出しました。

「さあ、これ で 安心 だ。また 人の 来
ない うち に たべよう よ。」

「なぜ 人 が 来る と、いけない の か。」

「だつて、見つかる と、ひどい 目 に あ

ふからね。」

「では、ずいぶんこはい所だね、こゝは。」

そんなことを言ひながら、ニひきの前に
ずみは、あらためて、「ちそうの前に
すわりかけます」と、今度はまた男の

(新漢字 安心)

(035.jpg)

人がはいって來たので、すぐまた、あ
わてて、穴の中へにげこみました。
かふいふことが度々つづくので、
ゐなかねずみは、ゆつくり「ちそうをたべ
るひまはありません。やつとたべ
かけても、しじゅうびくびくしてゐる
ので、おいしいのか、おいしくないのか、よくわかりませんでした。

三度目に穴から出て來た時には、
もうゐなかねずみは、つくづくうちへ
かへりたくなりました。

で、町ねずみに

「やむうなら。ぼくはもうかへるよ。

いへり おいしい バーチラ が 山 ほど
あつても、いんな こはい 思いを する
くらゐ なら、ゐなか のあの しづかな

(新漢字 度思)

(036. jpg)

うちへかへつて、それこそ、草の根
や、くるみのかたいみでも、ゆつくり
と、氣らくにたべてくらす方が、
どれほどましだか知れないから
ね。さようなら。」

ゐなかねずみはかう言つて町ねずみ
のとめるのもきかず、さつさとか
へつて行きました。

十五 雨の絲

銀の細絲、

ガラス絲。

光つてきれいな

雨の絲。

雨は銀雨、

(新漢字 絲 銀 細)

十五 雨の絲

細銀 絲

銀の細絲、

ガラス絲。

光つてきれいな

雨の絲。

雨は銀雨、



(037. jpg)

ガラス雨。

音もなく ある

雨の絲。

銀の細絲、

ガラス絲。

少しも きれぬ

雨の絲。

十六 牛若丸(うしわかしまる)

月のよいばんでした。

牛若丸が、ふえを吹きながら、歩いて
みました。

五ぢょうの橋に来ますと、

「待て。」

と言ふ者があります。

(新漢字少歩者)

(038. j p g)

見ると、大なぎなたを持つた、大きな男
が立つてゐます。

牛若丸は、

「だれだ。何の用か。」

と言ひました。

「べんけいだ。その刀がもらひたい。
よい刀を千本あつめるつもりで、
九百九十九本は取つた。もう一本で、
千本だ。さあ、刀を出せ。」

牛若丸は、びくともしません。

「刀がほしいか。ほしければ、取つてみ
よ。」

と言いました。

べんけいは、大なぎなたをふりまはして、
きつてかゝりました。

牛若丸は、ひらりとらんかんの上に

(039. jpg)

とび上りました。

べんけい が 上
を きる と、牛若
丸 は 下 へ と
び下ります。右 を
きれば、左 へ とび
のき、左 を きれ
ば、右 へ とびの
きます。強い べんけい も、だんだん つか
れて 来ました。

牛若丸 は、その 時、扇（あふぎ）で べんけい の
うで を 強く たたきました。べんけい の
大なぎなた が、がらりと おちて しまひま
した。

とうとう、べんけい は こうさん しました。
さうして、牛若丸 の けらい に なりました。



十七 自動車

オヒル カラ、私 ハ、正雄サン ノ ウチ
ヘ アソビ ニ 行カウ ト 思ツテ、外 ヘ
出マシタ。

トチュウ マデ 来テ フト 見ル ト、チョウ
ド 正雄サン ノ ウナ ノ 前 ニ、自動車
ガ 止ツテ キマシタ。 ソバ ニ、人 ガ 四
五人 ヨツテ キマシタ。

「何ダラウ。」 ト 思ツテ、私 ハ 急イデ
行ツテ見マシタ。正雄サン ガ キマシタ
ノデ、

「何 デス。」

ト、キムマス ト、正雄サン ハ、

「自動車 ノ コショウ デス。」

ト 言ヒマシタ。

「ドンナ コショウ デスカ。」

トキュマシタ ガ、正雄サン モ ヨク ワ
カラナイ下 見エテ、ダマツテ キマシタ。

ソノ 自動車 ニ ノツテ 来タラシイ、三人
ノ 知ラナイ ヲヂサン ガ、立ツテ キマシタ。

ソノ 中 ノ 一人 ガ、

「アノ、左ガハ ノ 後(ウシロ) ノ 車 ヲ、ゴラン
ナサイ。」

ト 言ヒマシタ。見ル

ト、ソノ 車 ヲ、今

運転手(ウンテンシユ) ガ 一生ケン

メイ ニ ナツテ ハ

ヅサウト シテ キ

ル トコロ デス。車

ハ タイヤ ガ ヒシャ

ゲテ キマシタ。



「タイヤ ガ ヒシャゲテ キマス ネ。」

ト 言ヒマス ト、ヲヂサン ハ、

「アノ タイヤ ノ 中 ニ、モウ 一ツ ゴ

ム ノ クダ ガ アル ノ デス。」

ト 言ヒマシタ。私 ハ、オトウサン ノ 自

轉車 ガ、サウ ナツテ キル コト ヲ 思

ヒ出シマシタ。

「ソノ グダ ガ 破レテ、中 ノ 空氣

ガ、ヌケテ シマツタ ノ デス。」

ヲヂサン ガ カウ 言ツテ キル 間 ニ、

運轉手 ハ 車ヲ ハヅシマシタ。サウシテ、

自動車 ノ 後 ニ ツケテ アツタ 別 ノ

車 ヲ 持ツテ來テ、取りツケマシタ。

スツカリ シゴト ガ スムト、運轉手 ハ

ヲヂサンタナ ニ、

「サア、ドウゾ。才待チドホ様 デシタ。」

(新漢字 破 空 別)

(043. jpg)

ト 言ヒマシタ。ヲヂサンタチ 三人、ハ
「ヤア、ゴグロウ デシタ。」

ト 言ヅテ、自動車 ニ ノリマシタ。

運轉手 モ ノリマシタ。

「ブルブル、ブルブル。」

下、自動車 ガ ウナリ出シマシタ。

ヲヂサンタチ ハ、私タチ ニ、

「サヨウナラ。」

ト 言ヒマシタ。私 モ、正雄サン モ、

「サヨウナラ。」

ト 言ヒマシタ。

自動車 ハ 動キ出シマシタ。

「ブツ ブウ。」

自動車 ハ 走ヅテ 行キマス。

私タチ ハ、自動車 ガ 見エナク ナル マ

デ 立ヅテ 見テ キマシタ。

十八 一寸ぼうし

おぢいさん と おばあさん が ありました。
子ども が ない ので、

「どうぞ、子どもを 一人 おさうけ くだ
さい。」

と、神様 に おねがひ しました。

男の子 が 生まれました。小指 ぐらゐ の
大きさでした。あんまり 小さい ので、一
寸ぼうし と いふ 名を つけました。

一寸ぼうし は、二つ になつて も、三つ
になつて も、少しも 大きく なりません。
おぢいさん と おばあさんは、心配 して、
「一寸ぼうし の セイ が、高く なります
よう に。」

と、毎日、神様 に おいのり しました。け

れども、やつぱり 生まれた 時 の まゝ
でした。

一寸ばうし は、十三 に なりました。ある

日、おぢいさん と おばあさん に、

「都く 行つて、えらい 人 に なりたい
と 思ひます。少し の 間、おひま を
ください。」

と 言いました。

一寸ばうし は おばあさん から、針 を
一本 もらひました。それを 刀 に して、
麥わら の さや に 入れて、こし に さ
しました。それから、おわん を もらつて、舟
に しました。おはし を もらつて、かいに
しました。

一寸ばうし は、おわん の 舟 に のつて、
おはしの かい で ジょうず に こいで、

大きな 川 を の
ばつて 行きました。
都 に つく と、
との様 の おやし
きへ 行きました。

「ゞめん ください。」

と 言ふ と との様 が 出て おいで に
なりました。が、だれ も あません。

「だれ、だらう。」

と 言つて、方々 おさがし に なりました。

「ゞ」 に ある の だらう。」

と 言つて、庭 を 見まはしながら、あしだ
を おはき に ならう と しました。する
と、その あしだ の かげ に あた 一寸
ぼうし は、

「あんでは いけません。」

と 言つて、あわてて と

(047. -page)



び出しました。さうして、

「けらいにしてもく

ださい。」

とたのみました。

との様は、

「これはおもしろい子だ。」

と言つて、けらいになさいました。

三年ばかりすぎました。一寸ぼうしは、ある日、おひめ様のおともをして、遠い所へ出かけました。

とちゅうまで來ると、どこからか、おにが出て来て、一寸ぼうしやおひめ様をたべようとしました。

一寸ぼうしは、針の刀をぬいて、おにに向かひましたが、とうとうつかまつ



(新漢字遠)

(048.jpg)

てしました。

おに は 一寸ばうし を つまんで、一口
に のんで しました。

一寸ばうし は、おに の おなか の 中
を、あちら こちら と かけまはつて、針
の 刀 で、ちくり ちくり と つゝきました。
た。おに は、

「いたい、いたい。」
と 言いました。

そのうち に、一寸ばうし
は おなか の 中
から はひ上つて、
はな の おくを
通つて、目 の 中
へ 出ました。さ
うして、針 の



(新漢字 通)

刀で目玉をつゝきました。ぴょこりとぢめんへとび下りました。

おには、目の中がいたくてなりません。目をおさへて、一生けんめいににげて行きました。打出の小づちも、わすれてにげて行きました。

おにのわすれた打出の小づちを見る

と、おひめ様は、

「これはよいものがある。」

と言つて、大そうよろこびました。これをふると、何でも自分の思ふ通りになるからです。そこで、

「一寸ばうしのせいが、高くなるよ

うに。」

と言つて、おひめ様は、さっそく打出の小づちをありました。

(新漢字打)

(050.jpg)

一寸ばかりのせいが少し高くなりました。

「もつと高くなれ、もつと高くなれ。」

と言ひながら、何べんもふりました。
一寸ばかりは、だれにもまけない大男になりました。

十九 土

草といふ草、

木といふ木、

一本一本、

土から生まれる。

花といふ花、

みといふみ、

それがのこらず

(新漢字 草)

土へと落ちる。

土の中に

何がある。

ほってもほっても

土ばかり。

二十 ジョアンぢいさん

ジョアンぢいさんは、もと私の家に
ゐたやさしい黒人のおぢいさんです。
今では、もう年をとつて、すっかりこ
しがまがつてゐます。

「今日は、ぢいやの所へ遊びに行
きませせう。」

と、ねえさんが言いました。

ねえさんと二人で出かけますと、ペ

リーも、尾 を ふりながら、ついて 来ました。

青々 と 立ちならんで ゐる コーヒー の
間 を 通りぬける と、小高い をか の 向

かふ に、小さい 小屋が 見えました。

「あれ が ぢいや の うち です。さあ、

もうすぐ です よ。」

じ、ねえさん が あせ を ふわふわ 言ひ

ました。

小屋 へ ついて 見る

と、ジョアンぢいさん は、

戸口 の 前 で、丸太

に こし を かけな

がら、たばこ を

吸つてゐました。

「ねえさん、今日 は。」



(053. jpg)

と 大びる で 言います と、ジョアンぢい
さん は、

「ハれ は、これ は。よく おいで だ ね、
ぢよつちやん、ぼつちやん。」

と 言いました。

ジョアンぢいさん は、私たち が 来た の
で、ほんとう に うれしかつた のでせう。
私たちの あたま を なでて くれたり、水
を くんで 来て くれたり、丸太 で すわ
る 所 を 造つて くれたり しました。

丸太 に こし を かけて あせ を

ふいて あます と、ざわざわ と 風 が、
バナ、の 木 の 葉 を 鳴らしながら、
吹いて 来ました。

コーヒ園 は、青い 海 の よう に 見
えます。

二十一 金のをの

木一りが、池のそばの森で、木をきつてゐました。をのに力を入れてこん、こんときつてゐました。

あんまり力を入れすぎたので、をのが、手からはなれて、とんで行きました。「あつ」と思ふ間に、をのは、深い池の中へどぶんど落ちてしまひました。

「あしまつた。」

と、木こりは、思はず大きなこゑを出しました。さうして、まつさをな水の上をじつと見ながら、「どうしたらよからう。」と



(055. jpg)

考へこんで ぬました。

すると、その 水 の 中 から、まつ白な
長い ひげ の 生えた おぢいさん が、出
て 来ました。さうして、

「どう した の だ。」

と きゝました。

木こり は、

「池 の 中 へ、をの を 落して しまひ

ました。」

と こたへました。

「それ は かはいさう だ。わたしが ひ
うつて やらう。」

かう 言ふ と、おぢいさん の 姿 は、す
ぐ、水 の 中 に 消えて、見えなく なり
ました。

しばらく する と、おぢいさん が 出て

(新漢字 生消)

來ました。その 手 には、美しい 金 の

をの が、きらきら と 光つて ありました。

「お前 の 落した のは、これ だらう。」

「いゝえ、ちがひます。それ では ございま
せん。」

「では、もう 一度 さがして みよう。」

おぢいさん の 姿 は、また 水 の 中 に
消えました。さうして、今度 は 美しい 銀
の をの を 持つて、出て 来ました。

「では、この をの か。」

「いゝえ、それ でも ございません。鐵 の をの
で ございます。」

「さう が。もう 一度 さがして みよう。」

おぢいさん の姿 は、また 水 の 中 に
消えました。

おぢいさん は、今度 こそ 木こり の 落
した 鐵 の をの を 持つて、出て 来
ました。

「これ だらう。」

「はい、それ で ござります。どうも あり
がたうございました。」

木こり は、その をの を 受取つて、何べん

も おれい を言いました。おぢいさん は、

「お前 は、ほん

とう に 正直
な 男 だ。こ
の 二つ の
をの も、お前
に あげよう。」



と 言ひながら、金 の をの と、銀 の
をの を 木こり に やりました。

(058. jpg)

木こり は、ふしぎな おぢいさん から、金
の をの と、銀 の をの を もらつた こ
と を、近所 の人 に 話しました。

となり の 若い 男 も、木こり でした。
それ を きく と、自分 も 金 の をの
や、銀 の をの が ほしく なりました。
若い 男 は、池 の そば の 森 へ 行
きました。をの で こん、こん、と 木 を
きり始めました。

そのうち に、若い 男 は、わざと をの
を 手 から はなしました。をの は どぶ
んと 池 の 中 へ 落ちました。

「あ、しまった。」

と、若い 男 は、できる だけ 大きな こ
ゑ で さけんで、水 の 上 を 見て あ
ました。

青い水の中から、おじいさんが出てきました。さうして、

「どうしたのだ。」

ときりました。

「池の中へ、をのを落してしまひ

ました。」

と若い男はこたへました。

「それはかはいさうだ。わたしがひろってやらう。」

かう言ふと、おぢいさんの姿は、すぐ水の中に消えて、見えなくなりました。

若い男は、金のをののことばかり考へて、待つてゐました。

しばらくすると、水の中から、おじいさんが出てきました。その手には、

美しい 金 の をの が、きらきら と 光つ
て あました。

「お前 の 落した の は、これ だらう。」

若い 男 は、すぐ、

「はい、それ で ございます。」

と、言つて しまいました。

すると、今 まで やさしさう に 見えて
ゐた おぢいさん の かほ が、急 に き
つく なりました。さうして、

「お前 の よ

うな うそつ

き には 金



銀 の をの も やる こと はできない。」

と 言つて、すぐ、水 の 中 に 消えて し
まひました。

二十二 ムシバ

花子サン ハ、ハ ガ イタイ ノデ、一バン
ヂュウ クルシミマシタ。

朝 ニ ナツテ モ、マダ イタイ ノ ガ
ナホリマゼン。花子サン ハ、オカアサン ト
ーショ ニ、ハ ノ オイシヤ様 へ 行キマ
シタ。

オイシヤ様 ハ、スグ 見テ クダサイマシタ。

「ヤア、ニ本 ナランデ ムシバ ガ デキテ

キル。オ菓子(カシ) ヲ タベスギマシタ ネ。」
ト 言ツテ、クスリ デ 洗ツタリ、クスリ ヲ

ツケタリ シテ グダサイマシタ。

花子サン ハ、イタイ ノ ガ 少シ ナホツ

タ ヨウ ニ 思ヒマシタ。

オイシヤ様 ハ、オカアサン ニ、

(062. jpg)

「コノ、前 ノ 方 ノ ムシバ ハ、生エカ

ハル ハ デス ガ、

オク ノ 方 ノ ハ、

一生 使フ 大ジナ

ハ デス。ソレ ガ、

カウ ムシバ ニ

ナツテ ハ イケマ

セン ネ。」

ト オッシシャイマシタ。サウシテ。花子サンニ、

「花子サン、アナタ ハ ハ ヲ、ミガキマス

カ。」

ト オキ、ニ ナリマシタ。

「毎朝、ミガキマス。」

ト、花子サン ハ 答ヘマシタ。 オイシャ様

ハ、

「夜 ネル 前 ニモ、ミガク ト イ、デ

(新漢字 使 答)



スガネ。サウスルト、コンナニ
ハガワルクナラナイデセウ。
トオツシヤイマシタ。花子サンハウナヅ
キマシタ。

オカアサントーショニ、オイシャ様ノ
オウチヲ出タ時、花子サンハモウ
ハノイタミヲ忘レテ、ニヨニヨシテ
キマシタ。

二十三 汽車

今は山中、今は濱、
今は鐵橋わたるぞと、
思ふ間もなくトンネルの
やみを通つて廣野原。
遠くに見える村の屋根、

近くに見える町ののき、
森や林や田や島、

あとへあとへととんで行く。

まはり燈籠の畫のように、
かほる景色のおもしろさ。

見とれてそれと知らぬ間に、
早くもすぎるいく十里。

二十四 浦島太郎

むかし、浦島太郎といふ人があります。
した。

ある日、濱べを通つてゐると、子ども
が大せい集つて、何かさわいでゐました。見る
と、かめを一ぴきつかまへて、ころがしたり、たゝいたりしていぢめて

ゐる の です。浦島 は

「そんな かはい

さうな 」と

を する も

の で な い よ。」

と 言 い ま す と、子 ど も ら は、

「な に。か ま ふ も の か、

ぼくた ち が つ か ま へ た の だ も の。」

と 言 ひ て、な か な か き こ ま せ ん。浦島 は、

「そ れ な ら、を が せ ん に そ の か め を

賣 つ て お く れ。」

と 言 ひ て、か め を 買 取 り ま し た。

浦島 は、か め の せ な か を な で な が ら、

「も う 一 度 と つ か ま る な よ。」

と 言 ひ て、海 へ は な し て や り ま し た。



それから 1111日後（のち）の「」でした。浦島が、舟にのつて、いつも通りつりをしてゐると、

「浦島さん、浦島さん。」

と、呼ぶ者があります。「だれだらう。」と思つて、ふりかへつて見ると、大きなかめが、舟のそばへおよいに来て、ぴょこりとおじぎをしました。さうして、

「この間は、ありがとうございました。私は、あの時助けていたかめです。今日は、おれいに、龍宮へおつれしませう。さあ、私のせなかへおのりください。」

と、言いました。浦島は、

「それは、ありがとうございます。」

と言つて、かめのせなかになりました。

かめは、だんだん 海
の 中 へ はいって
行きました。

しばらく 行く と、
向かふ に 赤や、青
や、黄 で ぬつた、
りつぱな 門 が 見えます。
かめ が、

「浦島さん、あれ が 龍宮 の
御門 です。」

と 言いました。

間もなく 御殿 へ つきまし
た。たひ や ひらめ など が、
むかへ に 出て 来て、おく の、りつぱな
御殿 へ 通しました。美しい 玉 や 貝
で かざつた その 御殿 は、目 も ま

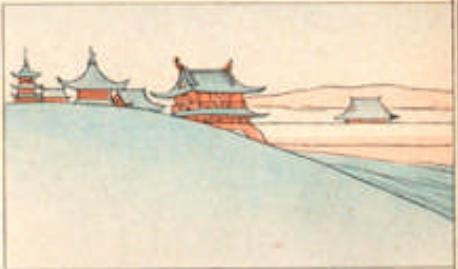
門 黃



かめは、だんく海
の中へは、って
行きました。
しばらく行くと、
向かふに赤や、青
や、黄でぬつた、
りっぱな門が見えます。

かめが、

貝



「浦島さん、あれが龍宮の
御門です。」

と言ひました。

間もなく

御殿

へつきまし

た。たいやいらめなどが、

むかへに出て来て、おくの、りっぱな

御殿

へ通しました。美しい玉や貝

でかざつたその御殿は、目もま

(068. jpg)

ぶしい ほど きれい です。そこへ、おと
ひめ様 が 出て いらっしゃいました。やう
して、

「こ」の間 は、かめ を 助けて くださいて、
ありがとうございます。どうぞ、ゆつくり
あそんで 行つて ください。」

と 言つて、いろいろ 『ちそう』 を して
くださいました。たい や、ひらめ や たこ
など が、大せい

で、おもしろい を
どり を をどりま
した。

浦島 は、 あまり
おもしろい ので、
家 へ かへる の
も 忘れて、 每日



(069. jpg)

毎日、たのしく くらして ゐました。しかし、

そのうちに、おとうさんやおかあさんのことを考へると、家へかへりたくなりました。そこで、ある日、おとひめ様に、「どうも長くおせわになりました。あまり長くなりますが、これからこれでおいとまをいたします。」

と言いました。

おとひめ様は、しきりに止めましたが、浦島がどうしてもきしませんので、「それでは、この玉手箱をあげます。

しかし、どんなことがあっても、ふたを開けてはなりません。」

と言つて、きれいな箱をおわたしになりました。

浦島は、玉手箱をかゝへかめにのつ

(新漢字 箱)

(070.jpg)

て海の上へ出ました。

もと の 濱べ へ かへつて 來ます と、
おどろきました。村 の ようす は、すつか
り かはつて ゐます。住んで ゐた 家 も
なく、おとうさん も、おかあさんも 死ん
で しまつて、知つた 人 は、一人 も 居り
ません。これ は どう した こと か と、
浦島 は、箱 を かゝへながら、ゆめ の
よう に あちら こちら と 歩きまはりま
した。

こんな 時に 玉手箱 を あけたら、どう
かなる かも 知れ
ない と 思つ
て おとひめ
様 の 言つた
こと も 忘



(新漢字 住居)

れて、その ふた を あけました。 すると、
(071.jpg)

中から、白いけむりがすうと立ちの
ぼりました。それがかほにかゝったか
と思ふと、浦島は、かみも、ひげも、
一度にまつ白になつて、しわだらけの
おぢいさんになつてしまひました。

二十五 リオ、デ、ジャネイロ

リオ、デ、ジャネイロは、ブラジルの首府(しゅふ)
です。世界中、どこへ行つても、これほど
美しい町はないといふことです。

じつさい、リオ、デ、ジャネイロは美しい所
です。町も美しく、山も美しく、海
も美しく、すべてがまるで畫(るい)のよ
うです。

(072. jpg)

ここに美しいのは、
夜、沖の方からな
がめた景色(けしき)です。濱べ
にあるたくさん
電燈(でんとう)が、海にうつって
あらわされるとかぐやく
さまは、ちょうど龍宮
のようです。

港としても名高く、世界の國々
の船が常に出入りし、それらの
船には、ひらひらとブラジルの國旗(いき)が
風にひるがへつて居ます。ここには
は、大学を始として、いろいろの
学校や役所があり、日本の大使館(たいしかん)
もあります。

(新漢字 沖 船 常 居 役)



あ
い
う
え
お

ぱ ぱ だ ざ が ん わ ら や ま は な た さ
ぴ び ぢ じ ぎ ゐ り い み ひ に ち し
ふ ぶ づ ず ぐ う る ゆ む ふ ぬ つ す
ペ ベ デ ゼ げ ゑ れ え め へ ね て せ
ぼ ぼ ど ぞ ご を ろ よ も ほ の と そ

もみさこやゐなれわりほい
せしきえまのらそかぬへろ
すゑゆてけおむつよるとは
んひめあふくうねたをちに

(074. jpg)

漢字表

(新出)

天毛學校古柱朝氣笑吸玉考色女男東羽
動病死力始休去鳥泣姿町金友書麥根合
毒肉好自分穴安心思絲銀細少步者用千
取破別寸指高都針舟遠通打草落家居屋
鳴海池森深消美鐵受正直若樣洗使答忘
汽濱村林田里集賣買呼助黃門貝箱住居
世界沖船常役

(讀替)

二十日時生今日生急間度上下動車止人

空金生中居

(假名附)

耳(みみ)時計(とけい)蛙(かえる)蝶(チヨウ)運(ウン)
ン)場(ば)教室(キヨウシツ)横(よこ)姓(ショウ)家
(や)紙(かみ)春(はる)野原(のはら)咲(さく)

客(キヤク)橋(ハシ)強(つよい)扇(あぶき)正(まさ)
雄(を)後(うしろ)轉(テン)手(シユ)神(かみ)配(ハ
イ)黒(コク)造(つくる)葉(は)園(エン)菓子(カシ)
橋(キヨウ)廣(ひろ)畠(はたけ)燈(トウ)寵(ロウ)畫
(るい)景色(けしき)浦島(うらしま)後(のち)龍宮
(リュウグウ)御殿(ゴテン)首(シユ)府(フ)電(デン)
港(みなと)國(くに)旗(キ)使館(シカン)

を
は
り

日本語読本（3）

昭和十二年二月十日印刷

昭和十二年二月十五日発行

著作権所有 著作権 発行者 ブラジル日本教育普及會

東京市下谷區長町一番地

凸版印刷株式會社

印 刷 者 井 上 源 之 丞

東京市下谷區二長町一番地

印 刷 所 凸版印刷株式會社

